

避妊と去勢のメリット・デメリット

子犬が欲しいのは犬？それともあなた？

避妊や去勢の手術は生後5カ月頃から行われることが多く、飼い始めた時から考える必要がある問題です。目的は、不幸な子犬を生ませないこと、将来起こるべき生殖器系の病気の予防などです。将来子犬を産ませたい、と考えている飼い主さんは、一度に何頭も生まれる子犬すべてに対してきちんと責任を果たせるか、幸せな生活を保証してあげられるかどうか、きちんと考え、避妊と去勢のことを知っておくとよいでしょう。

	メリット	デメリット
避妊	<p>病気にかかりにくくなる 乳腺腫瘍や子宮内膜炎、子宮蓄膿症にかかることがすくなくなります。</p> <p>発情しなくなる 発情期ごとの体調の変化や、出血の世話がなくなります。オス犬の反応も気にせずすむようになります。</p>	<p>出産できなくなる 将来子犬を産ませることができなくなります。</p> <p>太りやすくなることもある エネルギーの代謝に変化が起こるためか、太りやすくなる犬もいます。</p>
去勢	<p>病気にかかりにくくなる 7歳を過ぎると発症率の高くなる前立腺疾患や肛門周囲腺種、会陰ヘルニアなどの病気を回避できます。</p> <p>問題行動が減る マーキングや支配性による攻撃、ほかのオスとの争いといった行動を起こす可能性がぐんと低くなります。</p> <p>メス犬を気にせずすむ 発情期のメス犬に気をつかう苦勞が減ります。</p>	<p>交配できなくなる 精巣を除去してしまうため、精子を生産することができなくなり、交配が不可能になります。</p> <p>太りやすくなることもある エネルギーの代謝に変化が起こるためか、太りやすくなる犬もいるといわれていますが、去勢とのはっきりした因果関係は不明です。</p>

乳腺腫瘍とは？ 犬の各種腫瘍のうち二番目に発生の多いもので、乳腺組織にしこりがみられる病気です。発生の原因に女性ホルモンとの関係が考えられています。

子宮内膜炎とは？ 不妊症の主要な原因で、流産や難産などによる子宮や膣などの損傷の後に起こりやすい、子宮が膿を産生しない細菌に感染する病気です。この病気になると子宮蓄膿症になってしまうのはほとんど避けられません。

子宮蓄膿症とは？ 子宮内部に膿汁が貯留した急性または慢性の可能性疾患で、出産したことのない犬に発症しやすい病気です。

肛門周囲腺種とは？ 肛門の周囲に丸くて硬い塊ができる病気で、切除する必要があり、去勢手術によって再発を予防します。

会陰ヘルニアとは？ 腹膜が肛門左右の弱くなった筋肉を突き抜けて腹膜のうを形成する病気で、肛門周囲に隆起した部分が見られ、便秘を引き起こします。ホルモンのアンバランスが発症の原因と考えられています。